

私の動物社会学事始め

河合 雅雄
(ひとはく名誉館長)

私は昭和24年に京都大学の動物学科に入学した。まだ戦後の混乱と疲弊は続いており、食料や衣料は配給切符制で、生きていくのが精一杯の時代だった。しかしひもじい思いをしながらも、みんな学問への情熱は燃えさかっていた。

形態学、発生学、遺伝学等、それぞれ興味をひかれたが、ぴったり肌に合わず専攻する気にならなかった。これらの学問は個体を解体し、還元的方法に基づいた実験科学によって、生命とは何かを解析することを目的にしている。しかし、私は、いのちを持った動物の行動や生活をまるごと研究したかったのである。



自分の進路の模索に悩んでいたとき、古本屋で新書版の『生物の世界』を見つけた。目次を見ただけで大きな衝撃を受けた。「構造について」「社会について」「歴史について」……。難解な本だったが、著者（今西錦司）が戦争に駆り出される前に遺書として書いたものだけに異様な迫力に満ち、私は夢中になって読み耽り、著者の独創による「生物社会学」に惚れ込んだ。

私は哺乳類の社会を研究することに決心したが、具体的には何を勉強すればいいのかわからなかった。すでにローレンツ一派によりエソロジー（動物行動学）が確立されていたが、なぜか日本へは紹介されず、動物行動学の講義といえば感覚生理学的なものだった。新しい方法論を求めて文学部の心理学の講義を聴講し、当時最新の学問だった文化人類学を梅棹忠夫さんの指導で勉強し、人間の社会学の本を漁った。

今西さん（先生と呼ぶべきだが、私たちはさん付けで呼んでいた）の独創である生物社会学に魅せられた学生数人が研究グループを作り、哺乳類の社会の研究を開始することになった。旧制大学の最終年は3年であるが、この年は卒業論文を書かねばならない。卒論でその人物の研究能力が判定される。私はラビット（アナウサギ）の社会の研究に取り組むことにした。今では動物の社会とかシカの社会という言葉は日常的になっているが、当時は「社会」という概念は人間社会に特有のもので、動物の世界に社会はないというのが通説であった。ましてやマツの社会やアメーバ社会というのは、誤用というよりもナンセンスだというわけ。ウサギ社会、サル社会と主張する私たちは、学会では異端視あつかいであった。

私は病弱で野生動物を追跡することができなかったので、篠山の自宅の裏庭を金網で囲い、子ウサギを8匹放した。柿の木の上に観察小屋を作り、そこからウサギの行動を観察することにした。

総てが未知の世界であった。誰もどうしてよいか教えてくれなかったし、モデルも教科書もなかった。まるで海図のない無謀な航海に乗り出したようなものだった。探索行動を調べたり、ウサギの環境評価図を作るなどが一段落すると、何もすることがなかった。子ウサギは、食べる、休息、その間に少し歩く他何の変哲もない日常である。春の陽を浴びて、ついうつら

うつらと舟漕ぎする有様。

こんなのどかな風景を、いきなり破る衝撃的な事件が起こった。4月28日、子ウサギを放して18日目に、突如Aグループの4匹の子ウサギが追っかけあいをはじめたのである。小さな砂煙をあげる億かけっこが3回あり、4匹は仲よく肩を並べて休息した。春風に舞うこの小さなつむじ風は、未知の国への扉を開ける予兆として、私は胸の高まりを押さえつけることができなかった。その予感は3日後現実化した。4匹の子ウサギの追っかけあいは、闘争に移行していった。そして、4匹の間に順位がきまった。

つむじ風の Rond と名づけた追っかけあいは、順位決定戦への前ぶれだった。この後、ウサギたちはいろんなことを始め、社会行動や社会関係の種々相が明らかになっていった。

試行錯誤しながら深く考え、情熱をもって忍耐して待てば、自然は必ず不思議や感動の世界を見せてくれる。つむじ風の Rond は、このことをしっかり私の胸に刻みつけてくれた。



河合名誉館長による講演のようす（2007年2月11日、人と自然の博物館）